の二教育家をとり上げ、彼等の教育方針が肉體精神兩面の鍛錬にあること、換言すれば教育に於ける綜合統一を考へた點に中世とは全く fremd な新な斯岸的な教育觀點があり、このことは個人感情、及び個性の發展には意義深いものであると述べた。更に Matteo Palmieri が教育は社會に役立つものでなければならず、修道僧や隱者の如き孤獨生活を排したことに就て述べてゐる、かくのごとく Gentile, Saitta の研究を見る時我々はブルクハルトがすでにこれ等の點を正しく把握してゐたことに驚かされるのである。

最後にルネサンスは宗教的なるかどうか。ルネサンスの進行と共に宗教は Natürliche Religiosität より Pantheismus となつた。ルネサンスに於て生活や世界の斯岸性、內在性が强調されるかぎりブルクハルト同樣、ルネサンスの非宗教性を主張せねばならない。たとへば Boccaccio の立場は眞の基督者の宗教一般の墮落に對する反抗でも、亦、粗野な官能性の解放でもなく、それは最早基督者ならざる者の優越的な笑ひである。そしてこれは Lorenzo Medici, Poliziano, Ariosto, Machiavelli, Guicciardini に於ても見られるもので彼等はいづれも宗教には無關心だつたのである。

以上の如く筆者はルネサンスの起源探究者の立場に對し、個人主義と宗教性の問題によつてルネサンスの起源追究及び宗教性の强調に反對し一般にイタリヤルネサンス研究界の研究角度を述べた。內容に於て特に秀れた見解も見當らないがイタリヤ學界がブルクハルトの立場に强固な基礎を置いてゐることを述べてゐる點に興味が引かれる次第である。

尙別の問題ではあるが筆者が冒頭の註の中に Weise の論文の正當なることを評した後、美術史の領域に於て妥當なりと云つてこれを直ちに時代一般に擴充して考案する危險について Trecento の藝術とその時代の世界觀についてのべ、更に Quattrocento 後半イタリヤ美術に於ける最後のゴーティク的潮流の事實を以て直ちに Pulci, Boiardo Ariosto 等の Ritterpoetik の隆盛の事實と關聯せしめることを排し、Ritterpoetik は、中世的傳統によつて起つたのではなく全く新しい精神を以て起つたもので Antigotisch であり、かくルネサンスには多くの並行現象の有する事を指摘してゐるのは注目すべきであらう。(Deutsche Vjs f. Literaturwiss. u. Geistesgesch. 1935 Heft 3)〔鹽見〕

○コール交通及び聚落と地形

淡川康一解說

J. G. Kohl. 1708-1878 の Der Verkehr und die Ansiedelungen der Menschen in ihrer Abhängigkeit von der Gestaltung der Erdoberfläche Dresden 1841 は聚落地理乃至交通地理の權威あるクラシックとして現代に於ても、その價値を失はず、この方面の著述の冒頭に常に引用さるゝ處である。併し該本は約百年前の出版に係る爲今日では殆んど稀覯書の部類に屬し、之を披見し得る便宜は少く、例へ原書に就き得たりとするも、多くのクラシックがさうである如く、厖大、難解であつて、之を讀破してその眞髓を把握する事は容易でない。名古屋高商教授淡川康一氏は既に經濟地

理、交通地理に關する概論を上梓されて居り、稀に見る篤學の中堅地理學者であるが、先づコールを全譯ししかる後にコールの獨特なる部分を生かしつゝ、章節を整理兩配列して我々にも親み易き本解譯書をものされたのである。外國書の飜譯は、あらゆる場合に全譯が優れるものとは考へ難く、本書の如き體裁をとる事も大いに意義がある事と思ふ。地名に原語を反復註記されてゐるが、之は一回にして、後出のものは省略されてもよからう。又 landschaft は景觀と譯すよりも地方と云ふ意味がより妥當なる場合が二三ヶ所ある樣である。

コールは、地球上の各種の地形を圓、正方形、正三角形、楕圓形、平行四邊形等の幾何學的圖形に還元して、種々の條件を與ふる事により、そこに起り得べき交通路とその結節點に現はれる聚落とに就き考察し、交通型、聚落型の問題を取扱つた。然る後現在の世界にあてはめて彼の原則の適用例を示した。その原則は著しく形式に流れ、繁雜に陷る慊ありとは云へ、その基本的な部分は承認せらるべきものであらう。以下興味ある例證の二三を紹介すれば、中央に最高點を有する圓錐形の山地にあつては、聚落は同心圓的に發生し、山麓のもの程人口が大であるとしてハルツ山脈を擧げてゐる。又盆地の場合にはその逆であるとしてプラーグを中心とするボヘミヤ盆地を例示してゐる。石橋博士は九州の人口地理的考察に於て、國東半島を前者の例、竹田及都之城盆地を後者の例として極めて興味深き譯明を與へられた事がある。湖水の楕圓形のものにあつては長軸の兩端に主要聚落が現れるとし、スイスやスウィーデンの諸湖を擧げた。我が琵琶湖に於ける大津の位置も之に該當するものであらう。又地中海をも楕圓形の內海として論じ、斯くの如き大地形に於ては交通上最も惠まれた地點を云々するよりも地帶を考察すべきであるとし、オリエント地方が古代中世に占めた地位を述べ、又アドリヤ海奧の諸港及カルタゴを短軸の兩端に位置するものとして理解してゐる。我が瀨戸內海に於ける大阪灣岸地帶はあだかも地中海に於けるオリエントの位置にある、尾道港は丁度內海の中央にあると云ふ如き事が直ちに思ひ合される。本書は斯くの如く單に交通、聚落地理のみならず歷史地理にとつても極めて示唆に富むものである。（菊版一九二頁、定價貳圓參拾錢、古今書院發行）〔米倉〕